

ランボー、手紙の書き手として

——「アフリカ書簡」をめぐる考察——

井 村 ま な み

Rimbaud, épistolier

—— réflexion sur sa «correspondance africaine» ——

Manami IMURA

序論

ランボーの「アフリカ書簡」について

一般に、作家の書簡類はふたつの方向で研究対象となる。作品解釈や創造行為の手がかりを得るのに役立つか、作家の生涯とその生きた時代を照らす伝記的・歴史的資料となるかのいずれかである。ランボーの場合は事情が異なる。

1972年、プレイアード版『ランボー全集¹』末尾に収められた手紙類は、600ページに及んだ。作品のざっと3倍の量を占める手紙類は、この版にあって読者を圧倒した。231ページで作品の掲載は終わり、あとは延々と書簡が続く計算である。ただし600ページの書簡類すべてが、ランボーの書いたものに宛てて書かれたもので構成されているわけではない。彼のまわりで生きたひとびとが交わした手紙類—母親がヴェルレーヌに宛てた手紙、友人が別の友人に向けて書いた手紙—も挿まれ、また1891年11月10日以降、つまり詩人の死去以降に家族と関係者が交わした多くの手紙類、さらには彼の妹が残した日記と旅行記も加わり、ページを厚くしている。プレイアード版のこの編纂は、その後20年にわたってわたしたちに影響することになる。

あちらこちらから探し出され、寄せ集められた手紙の束は、分厚さをもって作品のページの薄さを補強するように思われた。当然のことながら散文で綴られている詩人の手紙は、そこに韻文作品の解説を見たい気持ちを掻き立ててやまない。ジャック・リヴィエールを先駆とする² テーマ批評の系譜は手紙に「手がかり」以上の重み、作品と同等の重みを持たせる。時代が下ってもこの性質は変わらない。ジャン＝ピエール・リシャールが「6月の手紙³」の一節を引くことで「夜明け」にまつわる作品の特徴を論じ始めるなら⁴、ミシェル・コローは作品のなかに「太陽＝父親」の図式を追い続けたあと、妹イザベル・ランボーのノートからの引用⁵をもって論を閉じ⁶、いずれも美しい批評として成功している。

1 Arthur Rimbaud, *Œuvres complètes*, édition établie, présentée et annotée par Antoine Adam, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 1972. (以下、この版は O.C. と略す。) この版の邦訳については『ランボー全集 I-III』(平井啓之、原享吉ほか訳、人文書院、1977年)を参照のこと。

2 Jacques Rivière, *Rimbaud*, Paris, Kra, «Vingtième Siècle», 1930.

3 «À trois heures du matin, la bougie pâlit : tous les oiseaux crient à la fois dans les arbres : c'est fini. Plus de travail. Il me fallait regarder les arbres, le ciel, saisis par cette heure indicible, première du matin.», O.C., p.266.

4 Jean-Pierre Richard, «Rimbaud ou la poésie du devenir», in *Poésie et profondeur*, Seuil, 1955, pp.189-250.

5 «En se réveillant, il regarde par la fenêtre le soleil qui brille toujours dans un ciel sans nuages, et se met à pleurer en disant que jamais plus il ne verra le soleil dehors. “J’irai sous la terre, me dit-il, et toi tu marcheras dans le soleil!”», O.C., p.704.

6 Michel Collot, *L’Horizon fabuleux I, XIX siècle*, Chapitre II (pour une thématique évolutive de l’espace rimbaudien), José Corti, 1988, pp.159-227.

ランボーと直接交わされた書簡のなかでも、文学活動に関わるものは1割に過ぎない。9割方は彼が詩作をやめた1876年以降に書かれた「アフリカ書簡⁷」と呼ばれるものだ。遠方の消印を伴う書簡は月日を追って淡々と続き、独立した書簡体小説のようにも見えた。歳月を経て「戸棚のなかから見つけ出された⁸」かのような古い手紙の束は、その「意味」を見出すよう研究者を強く誘う。この膨大な数の書簡は何を言おうとしているのか。文学性の欠如が逆に何かを訴えるように思われ、わたしたちはそこに詩人が断ち切った作品創造の面影を求めたい誘惑に駆られるのが常であった。誘惑に、たとえばアラン・ボレルは身を任せて躊躇しない⁹。テーマ批評とは逆の立場を選び、ボレルは書簡類の方を足場としながら結果的には書簡と作品をまったく同列に並べる。彼は書かれた状況と目的の違いを考慮せず、書簡と作品の双方を入れ子細工のように引用して飽きないのである。

1990年代、詩人の死後百年を記念して、書簡を網羅的に掲載する体の全集が相次いで出版された。アラン・ボレル他、ルイ・フォレストイエ、ピエール・ブリュネルによる3つの版¹⁰のうち、ボレルとブリュネルのものは作品と手紙類を分けて掲載するのではなく、書かれた年代に従い織り交ぜて編集する方法を採っている。「見者の手紙」とそこに挿入された初期詩篇、また『地獄の季節』とこれについて述べる手紙類は互いに隣り合い、作品執筆の動機と背景を読者に提供する形、すなわち書簡の意味を提示する形となっている。いずれの版も1876年以降はランボーが差出人である手紙を中心に据え¹¹、プレイアード版に比べると遥かに威圧感が少ない。それでもやはり最後に位置するのは、「散文的な」内容のアフリカ書簡の束であり、それが読む者に何がしかの理解を強要するに足る分量であることに変わりはない。この意味を理解することに関してルイ・フォレストイエとピエール・ブリュネルは、相反する態度を見せている。フォレストイエは詩人の営為と開拓者兼商人の半生に区切りを設け、アフリカ書簡は「反復が多く読む者を失望させる¹²」類の書きものであると言いきる。彼は個々の手紙の出典を述べるにとどめ、注釈を一切つけないのである。それに対して、ブリュネルは手紙のなかに過去の作品を感じ取ると、その思い出を注に載せる¹³。ふたつの理解はどちらも誠実なものであろう。ランボーと彼の詩作品に慣れ親しんだ者なら誰であれ、つまりわたしたちが「生きる存在 *«être vivant»*¹⁴」としてのランボーに関わるかぎり、彼が職業を変え別のペンを持って書いた文字であるとしてアフリカ書簡を全く問題にしないか、あるいは詩人が同じペンでその延長に書いたと認め作品の追憶に浸るか、ふたつにひとつの選択を迫られる。

7 *«les lettres africaines»* はルイ・フォレストイエの表現。1876年以降死去までにランボーが書いた手紙を指す。Arthur Rimbaud, *Œuvres complètes. —Correspondance*, édition présentée et établie par Louis Forestier, Robert Laffont, coll. Bouquins, 1992, p.532. ピエール・ブリュネルも *«Rimbaud l'Africain»* と言い、書簡に関しては *«sa correspondance d'Orient»* と言う。Arthur Rimbaud, *Œuvres complètes, poésie, prose et correspondance*, introduction, chronologie, édition, notes, notices et bibliographie par Pierre Brunel, La Pochothèque, Librairie Générale Française, 1999, p.523.

8 小説が未だジャンルとして確立する以前に書簡体小説が興隆したのは、語られることの「本当らしさ」を保証するためであり、「以下に続くのは戸棚のなかから見つけ出された手紙の束である」と前置きするのがその常套手段であった。Cf. Frédéric Calas, *Le Roman épistolaire* Nathan, 1996, p.9.

9 Alain Borer, *Rimbaud en Abyssinie*, coll. Fiction & Cie, Seuil, 1984. *Un sieur Rimbaud se disant négociant*, Lachenal & Ritter, 1984.

10 Arthur Rimbaud, *Œuvre-vie*, édition du centenaire, établie par Alain Borer, arléa, 1991. Arthur Rimbaud, *Œuvres complètes. —Correspondance*, édition présentée et établie par Louis Forestier, op. cit., 1992. Arthur Rimbaud, *Œuvres complètes, poésie, prose et correspondance*, introduction, chronologie, édition, notes, notices et bibliographie par Pierre Brunel, La Pochothèque, Librairie Générale Française, 1999. なお本論文中ランボーの手紙の引用は原則としてブリュネルの版からとし、以下(E)と略す。

11 フォレストイエはランボー宛の手紙を20通程度に抑えており、ブリュネルはランボーに宛てられた手紙は載せていない。

12 1884年10月7日アデン発の手紙のなかに、文学に携わった歳月を「不幸であったとき」と回想し、現在の仕事の価値を認める件がある(E, p.628)。このことから、ランボーが詩作を放棄したことに何ら悔いることはないと考えていたと判断するのが定説である。Cf. (E), p.971.

13 一例を挙げれば、1880年8月25日付けアデン発の手紙に関し「悪血」からの一節を引用して、「ランボーが想像のなかで生きたことの最初の接触である」とする。(E), p.949.

14 ヴァンサン・コフマンの表現。Vincent Kaufmann, *L'Équivoque épistolaire*, coll. «Critique», Les Éditions de minuit, 1990, p.7.

わたしたちの試みは、敢えてこの選択をしないことにある。アフリカ書簡の書き手であるランボー、匿名の「書く存在《être écrivain》」だけを問題にして¹⁵、彼にとって手紙を書く行為は何であったかを見きわめることが本論の目的である。研究者がアフリカ書簡に惹かれ続け、しかも安定した視線を注げずにいるなかで、ジャン・ヴォエルミは偏りのない立場を貫いている¹⁶。彼は手紙だけを書くようになったランボーを問題にしているのである。よって、本論の試みは一方でヴォエルミの延長に位置すると言える。彼が扱わなかったマルセイユからの手紙も含め、原則として家族宛の手紙を扱い、彼が手紙を書くときの癖（Ⅰ．アフリカ書簡の特徴）、手紙に繰り返される土地の名（Ⅱ．手紙を書く場所）、手紙を書くことによって書き手が得るもの（Ⅲ．手紙の力）を問うことによって、個々の書簡が意味することではなく、差出人としてのランボー像を提出したい。

Ⅰ．アフリカ書簡の特徴

「ある人物が特定の人物に宛てて、ある情報を伝えるために送る文書¹⁷」である手紙は、それと知らせるために形式にのっとって書き始められ、礼儀に適ったかたちで終えられる。アフリカ書簡も例外ではない。書き手は相手からの手紙を受け取っているとき、手紙の文頭にまずはその受領の報告を書く。冒頭を確認しよう。

「9月9日付けの手紙を受け取っています。明日フランス行きの郵便が出るので、返事を書きます¹⁸。」

（アデン、1880年9月22日）

「一昨日手紙を受け取りました。日付けが抜けていましたが、消印から1881年2月6日のものだと思います¹⁹。」

（ハラル、1881年3月12日）

手紙を閉じるときも同様である。書き手は相手の健康を気づかい、便りを待つ思いを記してペンを置く。

「今日はほんとうにとっても忙しくてこれ以上長くは書けません。ただみんなが元気であること、冬が厳しすぎないことを祈るばかりです。詳しいお便りをください。僕のほうは幾らか貯蓄ができそうです²⁰。」

（アデン、1880年11月2日）

このように枠組みは通常の手紙のやりとりに従いながら、アフリカ書簡は規範から逸脱している。まず、「交代の原理」に従っていない点だ²¹。文通は正常に機能すれば、二者間で交わされる会話と類似点を持つ。相手の返事を待って次の手紙を書く手続きを踏めば、文通は間延びした会話と見なすことができよう。ここでランボーは返事を待たずに書く。その大きな理由には当時の郵便事情があった。日付を検討してみると、フランスからの手紙を受け取るのにアデン滞在のときは3週間程

15 コフマンによる前提書は、《être vivant》と《être écrivain》の境界は曖昧なものであることを出発点としている。

16 Arthur Rimbaud, *Correspondance 1888-1891*, Préface et notes de Jean Voellmy, Édition révisée, Gallimard, coll. «L'Imaginaire», 1995. Jean Voellmy, «Les lettres de deux solitaires: Rimbaud et Paul Gauguin», in *Parade sauvage* n°16, Musée-Bibliothèque Rimbaud, Charleville-Mézières, 2000, pp.135-145.

17 «Écrit que l'on adresse à qqn pour lui communiquer qqch.» *Le Nouveau Petit Robert*, 1996, p.1273.

18 *Œ.*, p.556.

19 *Œ.*, p.567.

20 *Œ.*, p.560.

21 Cf. Catherine Kerbrat-Orecchioni, «L'interaction épistolaire», in *La lettre entre réel et fiction*, SEDES, 1998, p.31.

度、ハラルにいたるときは1ヵ月以上かかっていることがわかる²²。彼が投函した手紙も同じ時間を経て相手のもとに到着する。家族との文通を始めた当初は、郵便事情についての記述が目につく。

「あなたがたは文通に時間がかかると驚いていますが、それはあたりません。だいたい規則正しく届いています。長い期間をおいてですが。……距離が長い、それだけのことです²³。」

(ハラル、1881年7月22日金曜日)

「考えてもみてください。僕は去年の11月リヨンにラシャ服を2着注文したのに、まだ何も来ていないのですから！6ヶ月前に、ある葉の必要がありました。僕はそれをアデンに注文しましたが、まだ入手していないのですよ！みんな輸送中なのでしょう、悪魔のところへね²⁴。」(ハラル、1881年9月2日)

文通は「言葉が時間をかけて書かれ、相手に届くまでにまた時間がかかる²⁵」ため、口頭の対話にくらべると、通常に機能してさえ「遅いこと」を特徴とする。アフリカ書簡はこの特徴をさらに際立たせる。ランボーは伝えたいことがあればすぐに手紙を書く。そうしないと相手との間に大きな時間の隔たりが生じてしまって、交流が成立しない。またさし当たって伝えるべきことがなくても便船が出るときには手紙を書く。手紙の到着は彼の健在の証しでもあるからだ。

「心配しているお手紙、受け取りました。僕の方は、あなたがたに手紙を書かずして便をやり過ごすことはめったにありません。でも最近の2回は手紙をエジプトの便で発たせてしまったのです。今後はいつも飛脚便に入れるようにします²⁶。」

(ハラル、1883年10月4日)

時間軸に沿って図式化すると、彼らの文通は規則正しいジグザグの軌跡を描かずランダムな斜線の行き交いとなるだろう。

「あなたがたは2月16日付けの手紙を書いたとき、1月10日付けの僕の手紙を受け取っていないようですね。でも1880年12月14日付けの僕の手紙は受け取ったと言っています²⁷。」(ハラル、1881年3月12日)

「ドラエイからの手紙の入った1881年12月27日付けの手紙を、今受け取りました。例の金額を受け取った旨の手紙を2通書いたとありますが、どうしてまたその手紙が届かなかったのでしょうか。僕は僕で、1月5日付けでアデンからリヨンに電報を打ち、この金の支払いを催促したところです。あなたがたはまたどれだけの額を受け取ったかも書いていませんが、僕が至急知りたいのはまさにその点です²⁸。」

(アデン、1882年1月18日)

ランボーは、受取人の手もとに届くであろう未来に向けて一およそ1ヶ月後に向けて一、手紙を書き続けたのである。手紙が無事に到着するかどうか、それすら不確かな状況。このような条件下

22 当時フランスから海外に当てた手紙はどのような経路をたどって目的地に着いたのか、またどの程度の日数を要したのか。この事情を知るための現存する資料に *Album des Services Maritimes Postaux Français et Étrangers par Paul Jaccottey & Maxime Mabyre sous la direction de Émile Levasseur* がある。このアルバムには出版年度が記されていないが、地図に添えられた説明などから1892年に出版されたものと思われ、アフリカ書簡とほぼ時代を同じくする。これによると、フランスからアフリカ東海岸方面への便は Messageries Maritimes が請け負い、マルセイユからアデンまで約20日間を要したとされる。海運会社 Messageries Maritimes の名はアフリカ書簡にも散見する。「メサジェリの第1便は11月26日にアデンに向けてマルセイユを出航し、こちらには12月11日に着くでしょう。」「荷物はメサジェリ・マリティーム社を通して送ってくださいよ。まず調べてください。」(アデン発1880年11月2日)(E., pp.559-560.)

23 E., p.572.

24 E., p.574.

25 Catherine Kerbrat-Orecchioni, *op.cit.*, p.35.

26 E., p.611.

27 E., p.568.

28 E., p.582.

で手紙を書く習慣はどのような効果を生むだろうか。そこでは相手の存在が極度に希薄にならざるを得ない。これがアフリカ書簡第二の特徴である。「近況を知らせる«donner de ses nouvelles»」という名目のもとに、ランボーは自分の境遇にペンが及ぶと読み手のことを忘れてしまう。仕事に対する不満や生活から来る疲労を連綿と綴るとき、彼が家族の心情を考慮しているとは言えない。次のような手紙を読む者がなぜ「安心して」いられるだろうか。

「僕のことについては安心してください。僕の境遇に何ら変わったことはありません。依然として同じ店に雇われています。厭でたまらない国でろばのように汗を流しています。何とかここから抜け出してもっと愉快な職を得ようと四苦八苦しています。まったく完全に呆けてしまうほど時間が経つ前に、この生活が終わるようにと望むばかりです。……もうペンを置きますが、それは僕が非常に疲れていて、それにそちら同様僕の方にも何も目新しいことはないからです²⁹。」（アデン、1882年5月10日）

家族は遠方にいるのである。上の手紙を読んで、どんな手を差し伸べることができるだろう。返事のなかで「(フランスに戻って) 少し休むように」と彼を促したにちがいない³⁰。家族の思いやりに対して、ランボーは皮肉な口調でこたえている。

「6月19日の手紙受け取りました。親切なご忠告ありがとうございます。僕としても死ぬまでには休息がきてくれることを望んでいます。でも今では、僕はありとあらゆる苦勞に慣れっこなっています。それで僕が嘆くとしても、それは一種の歌のようなものなのです³¹。」（アデン、1882年7月10日）

彼は、相手が提案した具体的な「休息」を、「死」や「あらゆる苦勞」を引き合いに出して抽象度の高い「安息」に変えてしまっている。おまけに「自分の嘆きは口をついて出る歌のようなものだ(だから気にするな)」と言うのである。

自分の状態を伝えるとき、ランボーは読み手を念頭に置かない。読み手を排除していると言ってもよかろう。紙の上に叩きつけるような自嘲、極端な誇張は相手の反応を前もって封じてしまう。いつ果てるともしれない愚痴は、読み手の同情を買うというよりは読み手に嫌気を覚えさせる類のものである。「彼の近況」は受け取られることなく、手紙のなかで堂々巡りを繰り返す。

新しく足を踏み入れた土地の様子を知らせる必要に迫られたとき、彼のペンは別の方向へ向かう。勢いよく滑るペン先は今度は「近況を伝える」以上のものに広がり、展開の速度と描写の密度は読み手を置き去りにしてしまうのである。ジェノヴァの行路を伝える手紙はその典型だと言えよう。書き進められるにつれ家族の姿は薄れ、最後にはまったく消滅してしまう。手紙には筆者個人の姿もなく、完璧なまでの客観性が貫かれている。

「アンデルマットに着くまでに『悪魔カ橋』と呼ばれるすごい難所を通ります。でもあなたがたが絵葉書で見るシュプリューゲンの悪路ほど美しくはありません。……道路は6メートルあるかないかの幅で、右側はずっと高さ2メートルにちかい積雪で覆われ、それが路上にはみ出して高さ1メートルの障害物となり、おそろしい雹のあらしのなか、そこをふみ分けてゆかねばならないのです。われわれの周囲には巨大な事物がたくさんあるはずなのに、今や上にも下にもまわりにも影ひとつ見当たりません！道路も断崖も峡谷も空もなにひとつ見えません³²。」（ジェノヴァ、1878年11月17日）

29 *Œ.*, pp.587-588.

30 フランスを離れて以降、ランボーは受け取った手紙を保管しなかった。唯一の例外は1885年10月10日の母親からの手紙である(*O.C.*, p.404)。従って、家族からの手紙の内容についてはわたしたちが類推するしかない。

31 *Œ.*, p.588.

32 *Œ.*, pp.544-546. 引用文中の下線による強調はわたしたちによるもの。

雪に閉じ込められた世界、そこを進む一行の足取りが情緒的な形容を一切ぬきにして続く。文中で用いられている「あなたがた」はとりたてて家族である必要はない。この二人称は道順や建物の位置を示す際主語に使われる二人称—《Vous trouverez (verrez)》—、誰でもよい不特定の二人称だ。長い描写を終えたあと、書いていたのが手紙であったことを思い出して、筆者は次のように文を閉じる。

「僕はいっさいあなたがたのものです。ありがとうございました。20日ほど後にまた手紙を書きます。」

書き終えた高揚が伝わってくるようである。ありがとうございました。感謝の気持ちは、長い手紙を最後まで読み通してくれたことに対して発せられているのだろう。講演の最後の謝礼のようなものである³³。同様に、初めてアデンを紹介する際、その描写の宛て先に家族の姿はない。

「アデンはおそろしい岩石です。草一本水一滴ありません(海水を蒸留させて飲みます)。暑さは度を越しています。とりわけ6月と9月の、年2回の土用は酷暑です。事務所はとても涼しく風が通るのですが、昼夜を通じて35度の気温が続きます。ここではすべてが高価で下がることはありません。僕はここですべて四人のようで、確実に最低3ヵ月は留まらなくてははいけません³⁴。」

(アデン、1880年8月25日)

灼熱の岩地は、短いリズムに脈打ち (A/den/est/un/ro/c af/freux (7音節)/sans/un/seul/brin/d'her/be (6音節)/ni/u/ne/gout/te/d'eau/ bon/ne (8音節))、簡潔に描かれるがこそ手紙の枠を超えたりアリティを帯びている。そのすぐ前の段落で筆者が用いている冗長で繰り返しの多い語り口と対比するとき、乾いた筆致はさらに突出する。

「ここで、僕はコーヒーの商店にいます。退役将軍が営む会社です。事業はぎりぎりの感じで進んでいますが、この先はもっとよくなるだろうと思います。それで僕は、あまりたくさん稼げません。一日に6フラン以上は無理です。でもここに残るとしたら、それに残らなくてははいけないのですが、というのもここがどこからも遠すぎて、必要に迫られて立ち去るのに要する数百フランだけを手に入れるまでの数ヶ月間は留まらざるを得ないからなのですが、ここに残れば、責任ある地位がもらえると思います、別の町の支店のよう。そうなれば僕はもう少し早くお金が稼げることになるでしょう。」

収入が少ないことへの不満。先が見えないゆえに生ずる迷い。希望を託した予断。ことがらが整理されずに列挙され、《Aden est un roc affreux》で始まる次の段落は接木されたような違和感を放つ。「確実に最低3ヶ月留まらねばならない」。前段では不確かであった彼の状況までが、まわりの硬い風景に影響を受けて固定されているのである。ハラルについても同じである。自らの健康状態を憂えた後、筆者は別のペンに持ち替えて土地の描写をするかのようだ。

33 このジェノヴァ紀行に関してブリュネルは「ランボーがこの長い手紙を書く必要を感じたことは注目すべきだ」としており、ステインメッツはここに「確かな散文家」を見てとる。OE., p.943. Jean-Luc Steinmetz, *Arthur Rimbaud, Une question de présence*, Tallandier, 1991, p.265.

34 OE., p.555.

「気候は夏にはとてもじめじめしています。これは身体に悪い。きわめて不愉快です。僕にはひどく寒すぎるのです。……この国がまるで未開だと考えてはいけません。エジプトの軍隊、砲兵と騎兵があり、また彼らの役所があります。すべてヨーロッパにあるものと同じです。ただこの連中は烏合の衆に盗賊の群れです。現地人はガラ人、みんな百姓兼牧童で、こちらから攻撃しないかぎりおとなしい連中です。土地は比較的寒く、じめついています、上々です。でも農業は進んでいません。……³⁵⁾

(ハラル、1881年2月15日)

読むにつれて「不愉快な気候」が減じてゆくような感がある。書き手にとっても同様だったのだろう。彼にとって「とても《très》じめじめしていて、ひどく寒すぎる《beaucoup trop》気候」が後のほうでは「比較的《relativement》寒くじめじめしている」と表現が緩和されている。同じことがらを説明するのに自己を取り込むと冗漫な嘆きになるのが、自分を脇に置くと無駄がなくなる。客観的に書き進めるにつれて、筆者はその書き進める行為から力を得て、その力は現実の厳しささえ変えてしまうようである。

アフリカ書簡はその後、植民地化への言及が多くなってゆく。出発までの待機、煩瑣で厄介なできごとの報告、その後始末の報告で、書面は分断されてゆく。新しい土地を手紙のうえで描く機会が皆無となり、彼の「近況」すなわち「嘆き、愚痴、反抗への飛躍³⁶⁾」で書簡は埋められるようになる。1880年代から20世紀初頭にかけて、アフリカ東海岸は日を追って地図を塗り替えていた。ヨーロッパ諸強国の介入を受け、刻々植民地化が進んでいたのである。ランボーの書簡もまた、その渦のなかで翻弄される。

II. 手紙を書く場所

手紙が距離を置いた対話であるかぎり、冒頭では書き手が自分の「居場所」を伝え、相手のそれと対比するのが礼儀である³⁷⁾。「わたしは××にいますが、そちらは……」式の対比だ。アフリカ書簡の場合、この対比は大きく均衡を欠いている。ロッシュで農場を営む家族はその場を動かず、変化のない生活を送り続ける。かたやランボーの居場所は頻繁に変わり、生活状況の変動も甚だしいため、彼ばかりが今いる場所を言い募ることになる。しかも明日の行方は彼自身わからない。わからない行方を手紙には記さなくてはならない。アフリカ書簡は、場所の報告に関するこれらの矛盾を体現し続けると言えよう。

「この手紙の返事をどこに出したらよいか、住所を教えられません。というのも、僕自身次にどこにいるのかわからないからです。どんなルートを通して、どこへ向かい、何をどうやってするのか、わかりません³⁸⁾！」

(1884年5月5日アデン)

「手紙を書かなかったのはここに残るかどうかわからなかったからです。残るかどうかは今月の末にわかるでしょう。同封した契約書にあるように、契約が切れる3ヶ月前に更新するかどうか申し出なくてはいいけないのです³⁹⁾。」

(1885年9月28日アデン)

35 *Œ.*, p.566.

36 ヴォエルミはアフリカ書簡をこの3語で要約する。Jean Voellmy, «Les lettres de deux solitaires: Rimbaud et Paul Gauguin», *op.cit.*, p.135.

37 Catherine Kerbrat-Orecchioni, *op.cit.*, p.21.

38 *Œ.*, p.620.

39 *Œ.*, p.637.

確かでない予定を手紙に書かなければならない。そのため予定通りにことが運ばないときは、計画の不履行をも伝えなければならなくなる。次の2通は前言撤回の一例である。

「この手紙が着くとき、たぶん僕はタジューラにいますでしょう。オボックの植民地に付随しているダンカリの海岸です⁴⁰。」
(アデン、1885年10月22日)

「ショアの王国に向けて出発すると先に言いました。ここでは事業が予期できない形で遅れています。今月の末にならないとアデンを出発することはできないと思います。タジューラに宛ててもう手紙を書いてしまったでしょうか⁴¹。」
(アデン、1885年11月18日)

「Aへ行く」と告げる手紙1をBの地で発信する。相手に届く前に手紙1は効力を失う。手紙1は無効だという手紙2を同じBの地から書き送る。手紙2には別の地名Cが記されている。この作業の繰り返しによって、今いる場所Bも向かう土地であるAとCも、書き手のなかで重みを失ってゆく。彼は逗留の根拠も移動の価値も無にしてしまい、前言否定の反復は彼自身の論拠も砕いてしまう。場所は細切れになり、言葉は粉々になる。彼の居場所とは、実のところ「今手紙を書いている」場、まさにその一点しかないのである。こうして書き手が自分を追いつめてゆくのも、彼の「次の地」へと寄せる期待がゆき過ぎたものであるからにほかならない。期待は二重に過剰である。彼はまず、「ここ」に抱く不当な不満をそのまま「次の地」に対する期待に置き換える。畢竟、期待もまた不当に大きなものとなる。アフリカ書簡の書き手とは、到着して「ここ」になった途端その地に不満を覚える、そんな書き手なのである。過剰のふたつ目は、彼が「出発」それ自体に価値を付与していることに因る。出発したい。出発するだろう。出発は先に延びた。動詞を様々に変化させるにせよ、書き手が根幹に置くのは常に「出発」である。そのため、出発の先に位置する「次の地」があり余る意味を持つことになるのだ。こうして、書き手が「次の地」に抱く過剰な期待は、到着して覚える過剰な不満へと再び転換され、期待は日を追って累乗の勢いで膨れあがってゆく。アフリカ書簡とは、書き手が「次の地」の名を綴れば綴るほど、自分自身を追いつめていった過程である。どんどん厚みを増してゆく期待と不満。その板ばさみになって、彼は身を屈める。「次の地」を告げるために手紙を書き、そうして次の広い地平を開くどころか、彼は逆に自分の居場所を狭めていった。自らを手紙を書く事務机へと追いつめていったのである。

紅海をはさんでアデンとハラル、その間に位置するオボック、タジューラ、ゼイラといった地名が繰り返し行き来する手紙のなかで、「ザンジバル」は別の輝きを帯びて現れる。書き手は7年間にわたって、断続的にこの地名を書き続ける。列挙してみると、この地に託した希望の連鎖が浮かび上がってくる⁴²。アデンに到着してすぐ、彼はもうザンジバルへ発つことを考えている。

「数百フラン手に入れたら、ザンジバルに向けて出発つもりです。そこには何か仕事があると言われてますから⁴³。」
(アデン、1880年8月17日)

40 (E., p.639.

41 (E., p.640.

42 「ランボーはすべてから逃れたいと思うとき、この地の名を綴り続けることになる」。ステインメッツはこのように考える。Jean-Luc Steinmetz, *op.cit.*, p.285.

43 (E., p.554. 同年9月22日アデン発の手紙では「それにもう200フランほどは手元にあります。次はザンジバルにゆくことになります。ザンジバルには仕事があります」と告げている。(E., p.556.) ハラルに失望したときも同様である。ハラル発1881年3月12日の手紙では「ハラルではばかばかしいほど退屈しました。できると思っていたことも今のところできません。もしこの地方を離れるとすれば、たぶんザンジバルに降りるでしょう。大湖地方(グラン・ラック)で仕事が見つけられると思います」と言っている。(E., p.568.)

1882年アデンに戻り再び失望して、ザンジバルへの出発を夢見る。

「アデンに長くいるつもりはありません。……出発するとしたら、もうすぐ出発するつもりなのですが、ハラルに戻るか、でなければザンジバルに降ります。ザンジバルではとても良い推薦書がもらえるはずですから⁴⁴。」
(アデン、1882年2月12日)

1887年カイロに渡ったときは、ザンジバルへ向かう現実的な方策があったのだろう。切迫した調子で金の無心が続く。

「ここに長くいるつもりはありません。……ザンジバルにゆくかもしれません。ザンジバルからはアフリカや中国、日本に向けて長い航海ができます⁴⁵。」
(カイロ、1887年8月23日)
「数百フランしか使えるお金がなくて、それでは足りません。一方で、ザンジバルに来るように言われているのです。ザンジバルには仕事があり、アフリカとマダガスカルではお金を貯めることができます⁴⁶。」
(カイロ、1887年8月25日)

1887年も秋になると、彼はザンジバルに関する具体的な情報を入手して、その思いが幻想に近いものであったことを知る。11月5日付けの手紙は、ザンジバルの名の挙げる最後のものとなる。ザンジバルは彼にとって「次の地」の象徴であり、それをあきらめることは他のすべての「次の地」を断念するに等しいことがわかる。

「ここには一ヶ月います。それからザンジバルに向けて発つつもりです。ザンジバル行きに関しては、愉快的気持ちで決めるわけではありません。ひとびとは決まってひどい様子でザンジバルから戻ってくるので。でもザンジバルには仕事があると言われています⁴⁷。」
(アデン、1887年10月8日)
「結局のところ、決心するのに長い時間をかけたり、思うような仕事を見つけたりするのに時間をかけるつもりはありません。それに、たぶんザンジバルには行かないし他の場所にも行かないでしょう⁴⁸。」
(アデン、1887年11月5日)

「ザンジバル」の語が聞く者の耳を引きつけるのは確かである。Zanzibar。《des ans y barrent》「そこでは歳月がゆく手をふさいでいる」とも、《(de)s ange(s)y barrent》「そこでは天使たちがゆく手をふさいでいる」とも聞こえる地名は、20世紀になってからアポリネールの関心を引いている⁴⁹。戯曲『チレジアの乳房』は、この島がヨーロッパに向けて放つエキゾティスムを存分に利用している。朝市の開かれるザンジバルの広場で幕を開ける芝居は、舞台奥に無言の群衆を配する。これは島の民衆を表わし、ト書きで「メガホンを使って」という指示はすべて、彼らが叫ぶことになっている。立ち並ぶ家々と、垣間見える港の光景。占い師のテレーズ (Thérèse) が「これからはチレジ

44 *Œ.*, p.586. 同年4月15日アデン発の手紙でも「ただ、たくさん働いても、稼いだお金のほとんどすべてを使ってしまいます。それでアデンには残らないことにしました。一ヶ月後にはハラルに戻るか、でなければザンジバルに向かいます」と述べている。
(*Œ.*, p.587.)

45 *Œ.*, p.669. その翌日8月24日の手紙でも「ところで9月15日頃スエズからザンジバル行きの船に乗ることになりました。ザンジバルで働くための推薦書がもらえるので。ここは物価も高く……それがザンジバルでは内地で旅行ができるし生活もただ同然なのです。だからザンジバルの方に引き返します。ザンジバルへゆくための推薦書がもらえるだけでなく、ほかにもそこではたくさんのチャンスがあるだろうと思います。……お金はこの銀行に残しておきます。ザンジバルには商人がいて……」と繰り返している。
(*Œ.*, p.669.)

46 *Œ.*, p.671.

47 *Œ.*, p.676.

48 *Œ.*, p.684.

49 プリュネルの指摘による。*Œ.*, p.554.

ア (Tirésias) という男の名を名乗る」と宣言し、その夫が代わりに女性になるという痛快な戯曲はシュールレアリストの流れを汲み、韻文で進む。そこで Zanzibar の音は加工されて様々な語と韻を踏み—bobard/Zanzibar//Zanzibar/bar//Zanzibarienne/faim//fraise/Zanzibaraise/Thérèse—、この音が可塑性に富むことを示している⁵⁰。ザンジバルの響きはランボーの耳をも捉えたにちがいない。アフリカ書簡のなかで、開放の知らせを担って鳴り響く。

実際1880年代、イギリスの、次いでドイツの介入を受けてアフリカ東海岸が寸断されてゆくなか、ザンジバルとパンバの二島だけは自治を保っていた。ドイツがタンガニカを、イギリスがケニアを、イタリアがソマリアをそれぞれ保護下に置くとき、二島の自治はイギリスに保護権を譲渡する1890年まで続いたのである⁵¹。現地地で仕事を探する者の言葉を借りれば「仕事があった」のだ。1890年が近づくにつれて植民地化の進む状況が伝わったのだろう。「ザンジバル」を呼ぶランボーの声は小さくなる。「ザンジバル」に代わる「次の地」は見つからず、書簡の数は次第に減ってゆく。「次の地」を綴らない書き手は手紙を書く理由をなくした。それは裏返せば、手紙を書く机さえ置けない狭い場所へ自分を追い込んでいった結果でもある。たくさんの「次の地」は手紙に書かれるたびに彼の「居場所」を狭め、最後に彼はどんな居所も失くしてしまう。

Ⅲ. 手紙の力

マルセイユに戻ったランボーとアルデンヌの家族との間に、ようやく通常の文通が可能となる。妹イザベルに宛てた1891年7月15日付けの手紙⁵²は、2日前に受け取った手紙の返事である。

「13日付けの手紙を受け取り、返事を書きます。役所のこの文書と病院の証明書でどのようなことができるか考えてみます。」

2日で手紙が着く距離にありながら、右足の切断手術を受けた筆者と「健康な」受取人はかつてないほど遠くに隔てられている。手紙はマルセイユからアルデンヌへ届くのではない。病の地平から健常者の世界へ送りつけられるのである。病室と屋外を隔てる壁は厚く、今まで彼らを隔ててきた地理的な距離など何ほどでもない。わたしたちはIで、筆者が書く行為から力を得ることに触れた。その力を余すところなく見ることができるのは、この書簡に於いてだ。あいさつの後、筆者は兵役を免除されるために必要な手続きについて述べ、次いで自分の境遇を嘆き始める。

「僕は昼も夜も、どうやったら移動できるかその方法を考えています。本当に拷問です！あれもこれもしたいし、あちらこちらへゆきたいし、見たいし、生きたいし、出発したい。なのにできません。永遠

50 Guillaume Apollinaire, *L'Enchanteur pourrissant* illustré par André Derain, suivi de *Les mamelles de Tirésias et de Couleur du temps*, texte établi et préfacé par Michel Décaudin, Édition Gallimard 1921 pour *L'Enchanteur pourrissant*, Édition Gallimard 1957 pour *Les mamelles de Tirésias*, Édition Gallimard 1957 pour *Couleur du temps*, pp.93-158. «Zanzibar» にはまた、さいころを3つ投げて遊ぶゲームの意もある。3つのさいころが同じ目を出すとそれは «Zanzi» と呼ばれる。どの目が強い順が決められていて、参加者はそのルールに従って競う。1884年からとされるこの意が地名の «Zanzibar» に由来するのは確かだが、どのような関係を持つかについては不明である。(Grand Larousse encyclopédique, Larousse, 1964, t.10.) なお Larousse, *Grand dictionnaire universel du XIXe siècle* (Slatkin, 1982) にはこの意の記載はない。アポリネールは偶然を競うこのさいころ遊びを戯曲に取り入れ、対話する者の間に生ずる誤解をからかっている。「おれは «Zanzi» で失った/欲しかったものすべてを」「いや、あなたは «Zanzibar» にはいない/パリにいる」「ザンジバルだ」「パリだ」といった具合である。

51 本論末に添えた付録の地図を参照のこと。

52 GE, pp.739-741.

に不可能ということはなくても、少なくとも今後長いあいだ不可能です！そばにはこの呪うべき松葉杖があるばかり。この棒がなければ、一步も歩けないし、生きてゆけないのです。……」

段落を変えて、書き手は自分の病気の原因を説明しようと試みる。「最後に」という前置きは、出来事を回顧する姿勢を示すものである⁵³。

「以下に、病気の原因だと最後に思われることを書いてみます。ハラルの気候は11月から3月まで寒いのです。習慣から、僕はほとんど洋服を着ませんでした。麻のズボンと木綿のシャツだけです。そんな格好で一日に15キロから40キロも徒歩で歩き、あの地方の険しい山々を馬でめっちゃめっちゃに駆け回りました。疲労と暑さ寒さのため、膝に関節炎が広がったにちがいないと思います。」

書き手が文体を変えるのはここからだ。

「実際、それは（言わば）膝蓋骨のしたを槌で打たれるような感じで始まりました。軽いひと打ちが一分毎に襲いました。関節がひどく乾燥して腿の筋が萎縮しました。その次に、膝のまわり全部の静脈が腫れました。腫れは静脈瘤のように思われました。それにもかかわらず、僕は相変わらずたくさん、それも今まで以上にたくさん、歩きまわり仕事をしました。風に当たったために起きた炎症だと思ったからです。それから、膝の内部で痛みが増しました。それは、一步ごとに、側に釘を打ち込まれるようでした。でも歩きました。もっと痛くなっても。……ついで、膝の上部が腫れました。膝蓋骨がきかなくなり、膝の裏側も動かなくなりました。歩くことが困難になり、痛みはくるぶしから腰までの神経を揺さぶりました。ひどくびっこを引かなければ歩けなくなり、どんどん良くない状態になると思いました。でも仕事はたくさんありました。無理やりにでもしなくてはなりません。それで、脚を上から下まで縛り、マッサージをしたり、お湯につけたりし始めました。効果はありません。その間に、食欲がなくなってゆきました。しつこい不眠が始まっていました。僕はひどく衰弱してやせてゆきました。3月15日頃、横になることに決めました。少なくとも水平の姿勢を保つようにするのです。……でも、日を追うごとに、膝の腫れは大きくなり、膝はまりみたいになってゆき、脛骨の先の内側がもう一方の脚のよりもずっと大きくなっているのが見てとれました。膝蓋骨は動かなくなり、膝の腫れの原因になっている分泌液に浮かんでいる状態で、この分泌物が数日のうちに骨のように硬くなるのをおそろしい思いで見ました。そのときです、脚全体が硬直したのは。完璧に硬直して、一週間のうちに這ってしか移動できなくなりました。その間にも、脚と腿の上部はやせ続け、一方膝と膝の裏側は腫れあがり、固まって、骨に変わってゆくのに近く、肉体面でも精神面でも衰弱がひどくなりました。」

ここで注意したいのは、書き手が最初の文「En effet, cela a débuté par un coup de marteau […]」だけに複合過去を使い、そのあとのできごととはすべて単純過去で定着させていることだ。単純過去を使うことで、彼は「痛み」という極度に主観的な感覚を一挙につき放すことになるのである。同様に、当初はためらいとともに痛みの所在を示している（「（言わば）膝蓋骨のしたを槌で打つような」）のが、次からは迷わない。最初はごく限られた部位に感じ取った痛みの範囲が広がってゆく様子を、丁寧に膝のあたりを分割して（「関節」「腿の神経」「膝の内部」「膝の上部」「膝蓋骨」）描いてゆく。痛みは広がるだけでなく鋭くなってゆく。その様子を、的確な比喩を用いて指摘することも忘れていない（「軽いひと打ちが一分ごとに襲います」「一步ごとに、脇から釘を打ち込まれるよう」）。

いかに正確に痛みを取り出せるか、どこまで生々しく相手に伝えることができるか。次第に彼は熱中してくるようだ。ジェノヴァ行きやアデン、ハラル素描の際と同じ熱中である。手紙は確かに、

53 以下、文中の斜体による強調はランボー自身によるもの、下線による強調はわたしたちによるものである。

妹に向けて書かれ始めた。手紙が進むにつれ、つまり病状がひどくなるにつれて、書き手は彼女を置き忘れて進む。彼は病の世界を「書く」ことに没頭し、没頭は彼に自分自身をすら忘れさせる。自分を忘れた彼は知らず客観的になり、手紙は書き手も気づかぬうちに外界に通用するものとなる。外界とは病院の外、屋外全般である。ペン先は今やすべての健常者に向けられている。彼らは書き手とちがって屋外を自由に歩き回ることができるのだ。複合過去から単純過去への移行、身体の部分の列挙、比喩の導入の工夫は、いずれも読み手の関心を病気へ引き入れるのに不可欠な手はずである。「そのあとです」「ついで」という事件の順序を明白にする接続詞、「3月15日頃」といった時間的推移を示す表現は、描写を更に客観的なものに仕上げている。

痛みについての叙述にひと区切りをつけ、続く段落で書き手は視点を変える。病が引き起こした様々な不都合を語るのである。彼は降りかかってくる「不運⁵⁴」を、今度は数字を多用することで示そうとする。移動や悪天候といった短時間で終わることが望ましいことがらが長びき、休息のように長時間必要なことがらに短い時間しかかけられない。事態はことごとく、願うべき状態とは反対方向へと向かい、数に裏づけられた誇張は暗いユーモアを醸し出す。

「3月末、出発することに決めました。数日のうちに、すべてを清算して失いました。そして、硬直と痛みのためろばもらくだも使えなかったので、天蓋で覆った担架をつくらせました。16人の人夫にそれを担がせ、2週間かけてゼイラへ運ばせました。旅立って2日目、一行からずっと先を進んでいたとき、人気のない場所で雨に襲われ、16時間ものあいだ雨のなかに横たわったままにいました。雨を避けることも動くこともできずにです。それはとても辛いことでした。……ゼイラに着いたときは、へとへとに疲れ、麻痺していました。そこで4時間しか休まず、船はアデンへと出発しました。デッキの、マットレスのうえに投げ出され(船には僕を担架ごと引き上げねばなりませんでした!)、船酔いに苦しみ3日間何も口にしませんでした。アデンに着くと、また担架での移動です。それから何日かティアン氏のところで過ごし取り引きを片づけ病院へゆくと、2週間もしてからイギリス人の医者がヨーロッパへすぐ帰るように勧めたのです。」

こうして、ひとしきり過去をふり返った書き手は、再び現在の病室に戻る。

「確信しているのは、あの関節の痛みは、もしも初めの何日かのあいだに手当てをしていたら、簡単におさまっただろうし、長びかなかっただろうということです。でも、そんなことは知りませんでした。必要以上に歩いたり仕事をしたり、頑固さですべてをだめにしたのはこの僕なのです。こんな馬鹿げたことをしないように、どうして学校で医学について最低限のことを教えないのでしょうか。」

書く行為から彼がもう一度力を得るのは、このあとである。彼は手紙に、直接話法と二人称を導入する。要となる箇所は括弧内に原文を記すことにしよう。

「もし誰か (quelqu'un) がこんな状態 (dans ce cas) で僕に意見を求めたら、僕はこう言うでしょう。「そんなにまでなったのか (vous en êtes arrivé à ce point)。でも絶対に切断させてはいけない (mais ne vous laissez jamais amputer)。肉を切らせ、破らせ、細切れにさせてもいいけれど、切断されるのを我慢してはいけない (mais ne souffrez pas qu'on vous ampute)」と。死が訪れたとしても、四肢が足りないで生きているよりまだましだ。それに、それは多くのひとがしてきたことだ。もし、もう一

54 マリオ・マトゥーチの表現。Mario Matucci, «La Malchance de Rimbaud», in *Les Deux visages de Rimbaud*, À la Baconnière, 1986, pp.189-200.

度やり直せるなら、僕はそうするだろう。切断されるよりは、地獄落ちとして一年苦しむ方がまだましだ。」

ある病人から切断の是非について意見を求められた場合、自分ならどう答えるか。この仮定のもとに、手紙のなかに架空の病人「あなた《vous》」を導入した書き手は、直接話法でこの人物に答える。「そんなにまでなったのか。云々」。この段落で「僕」が書くことは、すべてこの「あなた」に向かっている。「あなた」が受取人イザベルでないのは、無論のことである。一時的に選ばれた「こんな状態の誰か」は、「僕」以外の誰かであれば誰でもよいのだ。どんなに健康な者でも「こんな状態」に陥る危険にさらされている。イザベルだけが、ふたり（「僕」と「誰か」）の間で交わされる会話を今現に「聞かされている」という理由で、逆に特権としてこの役回りを免除されている。

「あなた」は改行とともに架空の病から解放され、消滅するはずである。ところが次の段落が提示機能を持つ副詞で始まるため（《Voilà le beau résultat》）、どこかから「僕」の場面を見つめ続けることを強いられているようだ。ひとたび手紙に巻き込まれた架空の「あなた」に、退場することは許されない。結末を迎えるまで事態に立ち会うことを余儀なくされるのである。

「ほら、これがその結果のいい例です。僕は座っていて、ときおり起き上がり、杖をたよって百歩ほど飛び跳ね、また座り込みます。手は何もつかむことができない。歩いているときは一本しかない足と松葉杖の先から目が離せません。」

この段落の半ばで、「あなた」はもう一度はっきりと呼び出される。原文と照らし合わせると、書き手の用いる巧妙な手段が浮き彫りになる。傍観者にすぎないはずの「あなた」はものかげから呼び戻され、突然「僕」の肩代わりをするよう要求されるのである。

「頭と肩は前にかしいで、あなたはせむしのようにふくれている。自分のまわりでものやひとが動くのを見て、ひっくり返ってもう一方の脚も折るのではないかと怖くて、ふるえ上がる。あなたが跳ねまわるのを見て、ひとはせせら笑う。また座っても、手に力はないし脇のしたは痛む。まるで馬鹿者の姿だ。絶望にとらえられ、まったく身体がきかないひとのように座ったままだ。さめざめと泣き夜を待ち、夜になればなったで永遠に続く不眠が訪れる。そして前の晩よりもっと悲しい朝を迎える。などなど。次号に続く。」

«La tête et les épaules s'inclinent en avant, et vous bombez comme un bossu. Vous tremblez à voir les objets et les gens se mouvoir autour de vous, crainte qu'on ne vous renverse, pour vous casser la seconde patte. On ricane à vous voir sautiller. Rassis, vous avez les mains énervées et l'aisselle sciée, et la figure d'un idiot. Le désespoir vous reprend et vous restez assis comme un impotent complet, pleurnichant et attendant la nuit, qui rapportera l'insomnie perpétuelle et la matinée encore plus triste que la veille, etc., etc. La suite au prochain numéro.»

「あなた」とは、前段落での書き手の忠告に従わず、脚を切断させてしまった誰かの姿である。書き手が病を語り始めたとき、病とはまったく無関係であったわたしたちの、それが手紙の終わりに迎える顛末である。「あなた」はこうしてやっと「僕」と同じ地面に立てるのである。どんな単純な動作もままならない、不自由な世界の住人になれるのである。病状をまとめようとして書き始めた筆者は、わたしたちすべてを病人に仕立てあげずには気がすまない。読む者に病気を共有させようと、熱心に書いた手紙の効果は以上のようなものである。

「あなた」はまた、「僕」であってそうではない何者かである。様々な工夫を重ね、長い手紙を通

じて自己を客観化する努力を続けた筆者は、今や描き上げた像から完全に身を引き離すに至っている。「まるでせむしのように」「馬鹿者の姿だ」「まるで身体が効かないひとのように」と繰り返される直喩は、苦痛に歪み手術で変形した見覚えのない自分の身体を形容するのであり、今この手紙を書いている「僕」とは別ものである。筆者は手紙の力をもって、再び現実を変えることに一かつて、手紙のなかでハラルの湿気を霧散させたように一成功したのである。彼は読者を病の地に立たせ、代わって自分はそこから脱出し果せたのである。

結 び

アフリカ書簡の筆者とは、すべての手紙の書き手と同じ枠を借り同じ制限を受けながら、手紙という場を様々に利用する書き手である。相手が目前にいないのを良いことに、彼は手紙を不満を吐き出す場所として活用もすれば、受取人にではなく自分に活力を与えるために風景の描写に精を出す。ただし、書く行為から彼が得るのは単なる気晴らしではなく、彼を取り囲む現実を変容させ、陥った窮地から彼を救い出す「力」であった。身体の欠損という事態に、書き手が最大限に手紙一出版を願う必要もない、読者もひとりいれば事足りる便利な書きものの力を駆使したのは見たとおりである。

「続きは次号で」。Ⅲで辿ったマルセイユからの手紙は、このように終わっている。スタインメッツの指摘を待つまでもなく⁵⁵、「10歳のノート⁵⁶」と呼ばれる、ランボーの綴り方も同じように次号での続きを予告して終わる。

«La suite prochainement
ah saperpouillotte!»

詩人ランボーと書簡の筆者を敢えて切り離すこと。後者だけを問題にしてアフリカからの手紙を読むこと。この姿勢を序論で定め、論を進めてきたわたしたちの辿り着いた先が、この符合である。彼がまだ詩人としての自覚を持つ前の時代と、既に詩を放棄した後の、仕組まれたような一致だ。急ぐまいと思う。もとよりわたしたちの立場で、この事実を詩人の姿と結びつけることはできないのである。書簡だけを追った果てに、この符合に導かれたことを確認するにとどめよう。

ランボーの手になる最後の手紙には場所の名が記されている。病状は回復の兆しを見せることなく、彼は手紙のなかで退院と帰郷の決意を告げることになる。「ヴォンク駅」とは、ロッシュから3キロほど離れた駅である⁵⁷。

「2、3日のうちに僕は退院するつもりです。……あなたたちの言うとおり、ヴォンク駅で降りることにします。僕の部屋は2階にしてもらえればと思います。ここに手紙を出しても、もう無駄です。すぐ出かけるつもりですから⁵⁸。」 (マルセイユ、1891年7月20日、ランボーから妹イザベル宛て)

55 Jean-Luc Steinmetz, *op.cit.*, p.395.

56 *Œ.*, pp.73-77.

57 Claude Jeancolas, *Passion L'album d'une vie d'Arthur Rimbaud*, Textuel, 1998, p.209.

58 *Œ.*, p.743.

これは7月8日付けのイザベルからの手紙に対する返事であり、ランボーは妹の問いかけに答え、彼女の指示に従っているのである。

「こちらに戻る前に、帰る少し前でいいですから、1階と2階のどちらを寝室にしたら居心地がいいか教えてください。……降りるのはアティニー駅でなくヴォンク駅にしてください。兄さんのためだけでなく、私たちのためにもぜひそうしてください⁵⁹。」

(ロッシュ、1891年7月8日、イザベルから兄ランボー宛て)

ロッシュへはこの駅を経由せねばならないことは、6月8日付けランボー夫人が娘イザベルに宛てた手紙によってもわかる。そのなかで、母親はマルセイユを発つ日時を決めた旨を娘に伝えている。

「荷造りは整いました。明日の火曜日、午後2時にここを出るつもりです。ヴォンク駅経由で、木曜の晩にはロッシュに着くでしょう⁶⁰。」

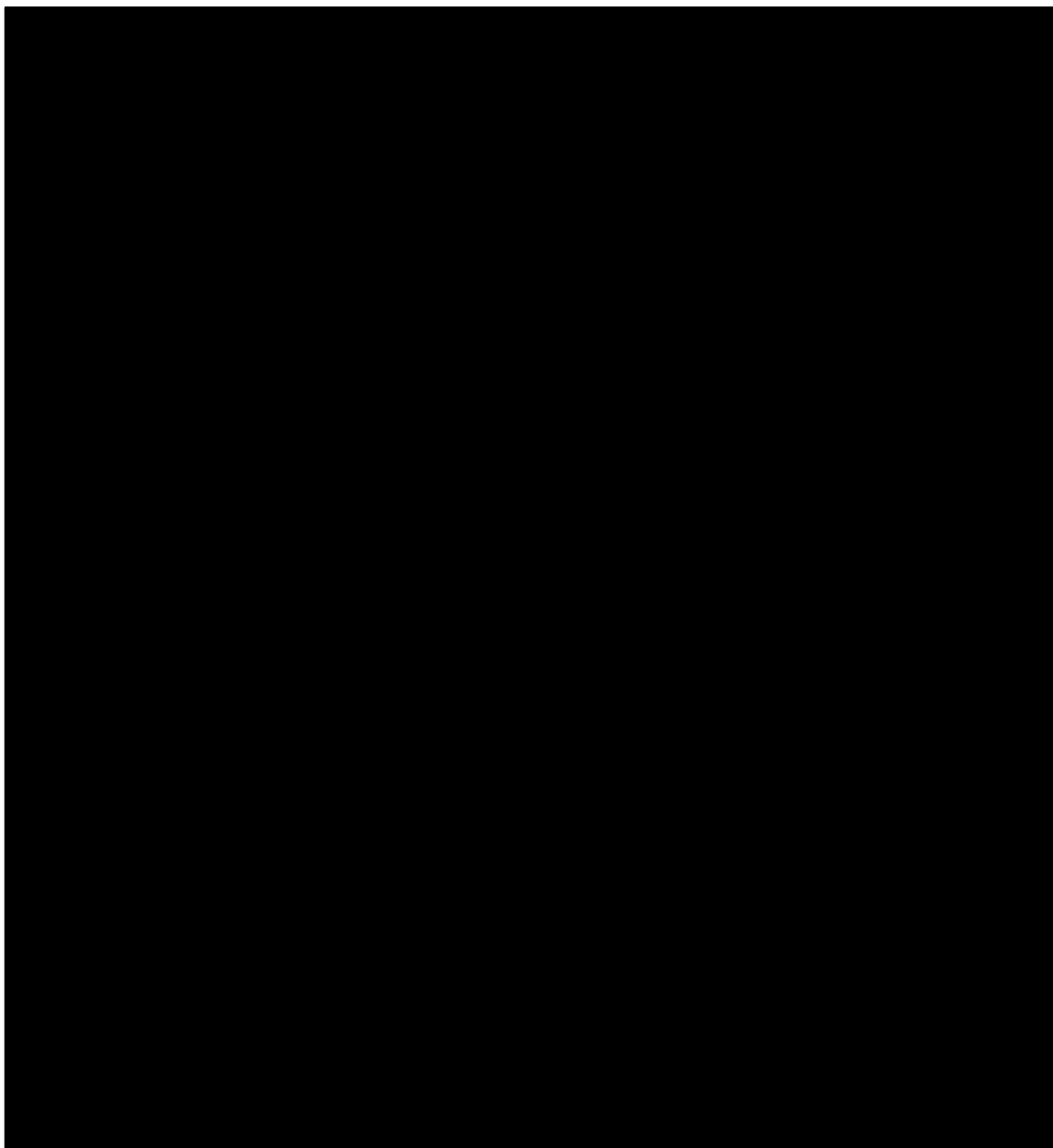
(マルセイユ、1891年6月8日、ランボー夫人から娘イザベル宛て)

アフリカ書簡を通じて150余りの土地の名が見られるなか⁶¹、ランボーが最後に綴る地がこの「ヴォンク」である。故郷へ帰り着くために降りなくてはならない、小さな駅だ。母親にも妹にも親しい駅、けれど彼自身は妹の指示なくして気づかなかったであろう駅。現在の居所をなくした彼は、時間を逆行する以外になかった。「次の地」に「2階の寝室」を指定した書き手は、その後二度自らとペンを握って手紙を書くことはないのである。

59 O.C., p.680.

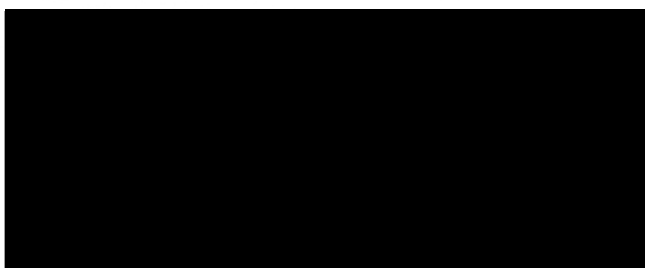
60 O.C., p.668.

61 Cf. «Table analytique des lieux», in *Œuvre-vie*, édition du centenaire, établie par Alain Borer, *op.cit.*, pp.964-980.



「1880年から1913年にかけてのアフリカ分割状況」

Atlas World History, edited by Geoffrey Barraclough, Times Books, 4th edition (first published 1993 by Times Books), 1994, p.237より作成



上図より Zanzibar 周辺の拡大図